2013年度 和の伝統文化コース

湯澤秀昭

和の伝統文化に学ぶ個と集のバランス ―茶事の実践をとおして―

序論

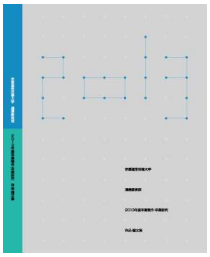
　日本の文化、その中で特に「和の総合伝統文化」といわれ、その人口が減少する「茶道」はどのような文化であるのか？　和食離れが進む中、農林水産省が中心となって進めた「和食」文化を広める活動のかいもあり、二〇一三（平成二五）年一二月四日「和食：日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録された。茶道の集大成「茶事」はその和食文化をも取り入れている。

　グローバル化する現代社会を生きる我々が次の世代へ、和の伝統文化をどのような文化として継承し続けるべきなのか？　和の総合伝統文化「茶道」、その集大成「茶事」の実践をとおして、生かし続けていける柔らかい知恵として、現代社会のあるべき生き方を考察する。

本論

　一三七億年前、ビッグバンにより宇宙が誕生し、四六億年前、地球が誕生したという。第四氷期、約四万年から三万年前、古モンゴロイドといわれる人類は、アジア大陸から陸続きになっていた日本列島の北ないし南から日本列島に入ってきた。それが我々自身の先人なのである。この間、コミュニ

2013年度
卒業制作・卒業研究 作品・論文集



目次

芸術学コース
歴史遺産コース
文芸コース
和の伝統文化コース
日本画コース
洋画コース
陶芸コース
染織コース
写真コース
アニメーションコース
情報デザインコース
建築デザインコース
ランドスケープデザインコース
空間演出デザインコース

ティーを形成し、この後に国家を形成したのである。この流れの中で、それぞれの地に住み着いた人類は同様にコミュニティー、国家を形成したのである。これらの活動の中で、各地の物、情報、文化が先人の移動した道なき道を順行・逆行して交流がなされ、その中の一つに喫茶文化もあったのである。その喫茶文化は我々自身の先人によって、和の総合伝統文化「茶道」として、体系化したのである。

　そもそも「伝統」とは何であろうか？　筆者は以下の仮説を立てた。

　「伝統とは」、時代が変わろうとも変わることのない、その「行うこと」への根本的な思想・目的意識を次世代へ伝え、いつの時代でも受け入れ続けられるものであると考えられ、「伝統」はグローバル社会において、根本的な思想・目的意識を、異文化圏で人々が交流し互いに理解を深め、共通の思想・目的意識として導き出すことによってのみ成しえ、より広域な社会へ伝承できるものであり、それは人々の意思で決定される。

　「古典とは」、伝統に基づき創造され、いつの時代でも、その社会に受け入れ続けられた「行ったこと」の成果・形式である。

　「新作とは」、伝統に基づき、新たな時代の需要により創造され、その社会に受け入れた「行うこと」の成果・形式である。

　新作は、それがいつの時代でも、その社会に受け入れ続けられれば古典となる。古典になるまでの期間は日本では今日、江戸時代以前とされているが、この期間はその時代・社会の変化の速さに応じ変わるものである。

　茶道を理解する術として、先人の史料があり、その史料を基にした久松真一等の研究「茶道論」がある。熊倉功夫はこの茶道論には「芸能論、茶禅一味論、分限論、趣味論の切り口がある」とし、筆者はこれに「健康論、経済活動論、政治活動論」を追加した。そして、史料、先行研究等を基に、「社会、経済、健康」の三視点で論述を試み、茶事「杓底一残水」の実践、アンケート結果をとおし、考察した。

結論

　茶は紀元前から飲食されていた。茶道は長きに渡り多くの人が関わり、形成されてきた文化である。その中でも特徴的なことは、幅広く他の文化を取り入れてきたことであり、前記茶道論で論じたようにそれが時代に応じバランスよく取り込まれていることが良いのである。また、茶道の実践である

卒業制作展・卒業生に寄せるメッセージ

一覧

茶事では、客への招待から、本席、その礼状まで亭主は誠心誠意、客に幸せを感じていただけるよう、もてなすのである。それが、亭主のみが感じることができる幸せでもある。独坐観念（どくざかんねん）、至福の時である。

より多くの人々が幸せを感じる社会にするためには、一人一人が自分自身、及び社会・世界へ目を向け、自己と他をグローバルという同一の器の中で、無駄にすることなく足りているもの、足りていないものを確認すること、すなわち「知足」が大切である。そして、その器の中で皆が争うことなく幸せに暮らすためにはものを無駄にすることなく、足りているものをお互いに分け与え、分かち合う、「共生」する方法を確認し言動すべきである。社会のバランスを考え、言動すべきである。これらは、茶事「杓底一残水」の結果で、その可能性が示唆された。

世界の社会格差は無くならず、格差是正は難しい事である。だからといって、何もしないのであれば発展はない。いつの日か、社会に生を受けた、より多くの人々が参加して、幸せを感じることができるバランスの取れた社会になることを「べき論」で言動することが重要と考える。結果は百年後になるのか、次の世代の脳細胞の中でその進捗を確認したい。

本論では総論を論じてきた。総論を踏まえた各論は今後の課題としたい。

« Previous 作品一覧へ戻る

» 利用規約 » 学内LAN利用

Copyright© Kyoto University of the Arts All Rights Reserved.